

かゑらじと かねて思へハ 梓弓  
なき数に入る 名をぞとどむる  
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第17号

平成27年9月8日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

## 吟詩の世界で詠われる小楠公

「楠正行と四條畷」と題して講演

8月30日、四條畷市詩吟連盟主催「第53回吟詠大会」開く

8月30日(日)、教育文化センターで四條畷市詩吟連盟「第53回吟詠大会」が開催されました。本会代表の扇谷は、同大会に招待され、「楠正行と四條畷」と題し、お話をする機会をいただきました。

詩に含まれている教訓を自らの修養の糧とし、人間としての情操の涵養に資するとされる吟の道に、楠公精神は大きく根付いています。この日の吟詠大会でも、「詠小楠公母」「大楠公」「櫻井訣別」の3題が吟じられました。

(社)関西吟詩文化協会ホームページより小楠公ゆかりの吟詩4題(解釈・作者略伝とも)を紹介します。

### 楠帯刀の歌 <元田永孚>

<すのきたたわきのうた <もとだえいふ>

乃父の訓は 骨に銘じ  
だいふのおしえは ほねにめいじ  
先皇の詔は 耳猶熱す  
せんこのうのみことのりは みみなおねつす  
十年蘊結す 熱血の腸  
じゅうねんうんけつす ねつけつのはらわた  
今日直ちに 賊鋒に向かつて裂く  
こんにちただちに ぞくほうにむかつてさく  
想う至尊に辞して 重ねて茲に來り  
おもうしそんにじして かさねてここにきたり  
再拜俯伏して 血涙垂る  
さいはいふふくして けつるいたる  
心を同じゅうするもの 百四十三人  
こころをおなじゅうするもの ひゃくしじゅうさんにん  
志を表わす 三十一字の詞  
こころざしをあらわす さんじゅういちじのことは  
鏃を以て筆に代え 涙に和して揮う  
やじりをもってふでにかえ なみだにわしてふるう

### 銃は板面に迸って 光陸離たり

ぼうはばんめんにとぼして ひかりりくりたり

北のかた四條を望めば 妖氛黒し

きたのかたしじょうをのぞめば ようふんくらし

賊將は誰ぞや 高師直

ぞくしょうはたれぞや こうのもろなお

渠が頭を獲ずんば 臣が頭を授けん

かれがこうべをえずんば しんがこうべをさずけん

皇天后土 臣が臆を鑒みよ

こうてんこうど しんがおもいをかながみよ

成敗は天なり 言う可からず

せいはいはてんなり いうべからず

一氣磅礴して 萬古に存す

いっきほうはくして ばんこにそんす

君見ずや芳野廟板 舊鑿の痕

きみみずやよしのびょうはん きゅうさくのと

今に至るまで生活す 忠烈の魂

いまにいたるまでせいかつす ちゅうれつこのたましい

### 【解釈】

父正成から桜井駅で受けた遺訓は骨身にしみわたり、先皇后醍醐天皇御臨終の時、彼の賊を亡ぼせとの詔は今もなお耳底に残っているのである。

その後10年間つもりつもった討賊の精神は胸の中にたぎり、今日国賊の先頭に敢然と立ち向うことになった。

思えば正行(まさつら)は後村上天皇にお別れし決意の程を申し上げ、更に後醍醐天皇の御陵である延元陵に再拜して、ひれ伏して熱い涙を流したのである。

同じ志の者143人と共に決死の覚悟をしたのであるが、その志は「梓弓」の歌三十一字の詞に表れている。

鏃を筆のかわりにして、涙と共に揮い如意輪堂の戸びらの板面に、いきおいよく走る矢じりの先はきらきらと光まばゆくみえる。

北の方、四條畷の辺りを望めば、あやしい気が黒くたちこめている。賊の大將は誰かといえば高師直である。

彼の首を討ち取ることができないなら、わが正行の首を与えよう。天地神明、決意の心をよくご覧ください。

勝負は天のみが知るところ、とやかく言うべきことではない。正行の一片の忠義の心は、天地の間にひろがって万世の後までも続いている。(かくして四條畷の戦いで最期をとげた)

皆さんご覧なさい、如意輪堂の鎌のあとと、今日まで忠義の魂が生きつづけているではないか。

### 【作者略伝】元田 永孚 1818—1891

字は子中(しちゅう)、伝之丞(でんのじょう)と称し東野(とうや)と号す。幕末明治の漢学者。文政元年熊本市に生まれる。幼にして学を好み13歳にして詩を作り、進んで修身治国の学に志す。明治4年宮中に入り、明治天皇の侍講(じこう)となる。

### 櫻井訣別 <頼 山陽>

さくらいけつべつ <らい さんよう>

海甸の陰風 草木腥し

かいでんのいんふう そうもくなまぐさし

史編特筆 姓名馨し

しへんとくひつ せいめいかんばし

一腔の熱血 餘瀝を存し

いっこうのねつけつ よれきをそんし

兒曹に分與して 賊庭に灑がしむ

じそうにぶんよして ぞくていにそがしむ

#### 【解釈】

海辺の町はずれの湊川から吹いてくる雨雲の風は、あたりの草木までが腥い感じがする。しかし、大楠公の忠誠は、歴史の上でも特に明記されて、その名は永遠に馨(かんば)しく伝えられている。

この桜井の駅に来て、自分の胸一杯に満ちた忠誠の熱血の余ったしずくを、自分の子供の正行(まさつら)に分け与えて、将来賊を倒し忠誠を尽くすよう訓話して河内に帰した。

### 【作者略伝】頼 山陽 1780—1832

名は襄(のぼる)、字は子成、号は山陽。安永9年12月大坂江戸堀に生まれた。父春水は安芸藩の儒者。七歳叔父杏坪について書を読み、18歳江戸に遊学した。21歳京都に走り脱藩の罪により幽閉される。後、各地を遊歴し天保3年9月病のために没す。

### 小楠公の墓を弔う <杉 孫七郎>

しょうなんこうのはかをとむろう <すぎ まごしちろう>

南朝の命脈 一絲懸かる

なんちょうのめいみやく いっしかかる

身は死し家は亡びて 名は永く傳う

みはしいえはほろびて なはながつとう

限り無きの秋風 湊川の涙

かぎりなきのしゅうふう みなとがわのなみだ

也此の地に来て 灑ぐこと潜然

またこのちに来たて こそぐことさんぜん

#### 【解釈】

南朝の命脈は一本の糸即ち楠公一家にかかっている。今は楠公も

戦死し、その家も亡びたがその名は永く伝わっている。

限りなき寂しさを誘う秋風のもと湊川にて大楠公の忠烈に泣いて来たが、今又四條畷の小楠公の墓の前に立って更に同じ涙を流すのである。

### 【作者略伝】杉 孫七郎 1835—1920

聴雨(ちょうう)と号す。藩学明倫館に学び、吉田松陰(よしだしょういん)の教えを受け文久2年松平石見守(まつだいらいわみのかみ)に従い欧州に遊歴し諸般の事業を調査、また明治維新前後国事に奔走し重きをなす。能書家として知られる。

### 小楠公の母を詠ず <本宮三香>

しょうなんこうのははをえいず <もとみやさんこう>

南朝の烈婦 姓は楠木

なんちょうのれつぷ せいはいくすのき

許さず我が子の茲に 腹を屠ふるを

ゆるさずわがこのここに はらをほふるを

櫻井の遺訓 汝忘れたるか

さくらのいくん なんじわすれたるか

刀を奪い死を諫めて 涙目に溢る

とうをうばいしをいさめて なみだめにあふる

正行感激して 誠忠を誓う

まさつらかんげきして せいちゅうをちこう

血戦幾たびか奏す 竹帛の功

けっせんいくたびかそうす ちくはくのこう

君見ずや斯の母在りて 斯の子在り

きみみずやこのははありて このこあり

忠孝兩つながら全きは 小楠公

ちゅうこうふたつながらまったきは しょうなんこう

#### 【解釈】

南朝の中に優れた婦人がいるが、その姓は楠木で、彼女は自分の子が(湊川の戦いで父が惨敗したのを追って、父の形見の短刀を持って)腹を切って自害しようとしたのを許さなかった。

母は「桜井の駅での父の遺訓をそなたは忘れたのか」といって短刀を奪い、死んではいけないと諫めたが、その目には涙があふれていた。

息子正行は母の真情に感激して、その後勤皇のために真心を捧げる覚悟も堅く、幾度も命をかけて戦いをして(北条軍の敵将高師直=こうのもろなお=との四條畷での戦いで武運つたなく散華=さんげ=したが)歴史に残る立派な功績をあげた。

あなた方は知っているでしょう。この母にしてこの子が有り、朝廷への忠誠心と母親への孝行心の両者を全うしたのはこの小楠公であることを。

### 【作者略伝】本宮 三香 1878—1954

千葉県香取郡津宮村(現佐原市津宮=さわらしつのみや)に生まれる。名は庸三(ようぞう)、字は子述(しじゅつ)、別に風土子(ふうどし)と称し、三香は号。幼にして漢学漢詩を学ぶ。大正2年「江南吟社」を設立、のち水郷吟詠会を組織し木村岳風の日本詩吟学院の講師を委嘱されるなど作詩及び詩吟の普及に力を傾けた。

(文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭)